

宇和島市吉田町における平成 30 年 7 月豪雨の災害体験者に対するインタビューと それに基づく災害エスノグラフィーの作成の標準化

愛媛大学 学生会員 ○高岡 真実
愛媛大学 フェロー 森 伸一郎

1. はじめに

平成 30 年 7 月豪雨で、愛媛県宇和島市は大きな被害を受けた。今後の教訓と記録を将来へ残し伝えることはとても重要であると考えられることから、災害実態をより詳細かつ総体的に把握し記述する方法であるエスノグラフィー¹⁾に着目した。災害の事前、最中、事後の行動を適切にするには、社会や地域コミュニティとして追体験できるような仕組みがあることが望ましい。

本論文では、宇和島市立吉田中学校の生徒が防災教育の一環として総合の学習の時間を利用し吉田町内の住民を対象に実施した豪雨被害に関するインタビュー調査の結果より、災害エスノグラフィーを作成する。災害エスノグラフィーの作成は今後の教訓と記録を将来へ残し伝える手法として有効であるといえるのかを明らかにすることを本論文の目的とする。

2. インタビュー概要

吉田中学校 1 年生が居住小地区ごとに分かれ、吉田 1～5 班、立間 1～3 班、喜佐方 1～2 班、奥南班、玉津班の計 12 班を構成し、夏休みを利用してインタビューを実施した。

まず、インタビューの方法や雰囲気をつかむために A～F の試行班を構成し 6 名にインタビューを実施した。その後、先ほどの 12 班それぞれでアポイントを取り、各班 2～4 名にインタビューを実施した。ディレクター、動画係、写真係、メモ係、インタビュアーの役割を作り、インタビューがスムーズに行えることを目指した。写真-1 にインタビューの様子を示す。



写真-1 インタビューの様子

3. インタビューの編集

3.1 トランスクリプト

トランスクリプトの作業は、中学生自身が実施した。インタビュー時に撮影した動画を視聴し、筆記による文字起こしを実施した。これらの作業の特徴として、誤った助詞・漢字を使用している点、平仮名のみや漢字仮名交じりが多い点があげられた。写真-2 にトランスクリプトの様子を示す。

3.2 テキスト化

前項に記載した中学生による筆記の文字起こしを、Microsoft word を用いてテキスト化を実施した。その際、中学生が行った文字起こしを、ありのままの状態テキスト化することを目指した。その際の処理原則を表-1 に示す。

この処理原則にしたがい、中学生の筆記による文字起こしのデータを得ることができた 16 件を対象にテキスト化を実施した。表-2 に 16 件のテキスト化結果を示す。



写真-2 トランスクリプトの様子

4. 災害エスノグラフィーとは

エスノグラフィー(Ethnography)とは、さまざまな国民や人種について、その人たちの風俗習慣およびその

間に見られる差異を科学的に記述することである²⁾。

田中・林・重川・浦田・亀田(2000)では、災害過程における記述は災害エスノグラフィーとよばれ、その重要な点として、私たちが無意識にいだく予断を排して、災害現場にいわせられた被災者・災害対応者の視点から見た災害像を描き、災害現場に合った暗黙のルールや原則、あるいは被災者・災害対応者が災害に対して持つ文化をその場にいあわせなかった人々に理解可能な知識体系に翻訳すること、とされている³⁾

5. 災害エスノグラフィー作成

テキスト化を実施したなかで、インタビュー終了までトランスクリプトが実施されていた喜佐方2班の内田さんを対象として災害エスノグラフィー作成を行う。その前に、筆者自身もインタビュー動画を視聴し、中学生が行ったトランスクリプトの整合性を確認した。その結果、文が抜けている箇所がある点や、感嘆詞(うん、あの、その、いや等)が抜けている点、方言が標準語となっている点などが見られ、それらを抜けているところは埋め直し、方言は方言の形のまま記述するといった形に訂正した。

喜佐方2班内田さんへのインタビュー内容のトランスクリプトは4807文字で、災害エスノグラフィーでは689文字となった。災害エスノグラフィーによってまとめられたものを読むだけで当時の状況が伝わるように、少ない文字数の中に要点をしっかりと詰め込むことを意識して災害エスノグラフィーを作成した。

6. 結論

災害エスノグラフィーの作成は、今後の教訓と記録を将来へ残し伝える手法としてとても有効であるといえる。人間は自分の体験や学習に基づいて行動するが、このエスノグラフィーを用いて災害マップ等のエピソードとしてまとめることで、短時間で過去の災害の様子を把握できる。さらに、災害を追体験したような感覚が得られやすい。筆者自身、災害エスノグラフィーを作成していく中で、ソフト面での吉田町住民の防災対策の不十分さや災害発生前の災害に対する意識の低さが、災害の前後で変わっていく感じが感じられた。そして、ボランティアというのは物理的な手助けだけでなく、心の手助けもできるということ、まるで自分がその場に居合わせたかのように感じ、当時の情景が次々と頭の中に浮かんできた。

追体験というのは、いざというときの判断材料になり、日ごろの防災対策や防災意識を見直すきっかけとなると考えられる。今回は宇和島市吉田町における平成30年7月豪雨の災害エスノグラフィー作成を行ったが、吉田町のみならず今後の豪雨災害における伝承を手助けするツールとなりうる。

謝辞:調査にあたり、宇和島市立吉田中学校の皆様には大変お世話になりました。記して謝意を表します。

参考文献: 1) 林勲男: 災害エスノグラフィーとインタビュー, 自然災害研究の方法論, pp236-241

2) 林春男・重川希志依: 災害エスノグラフィーから災害エスノロジーへ, 地域安全学会論文報告集, No. 7, pp. 376-379, 1997

3) 田中聡・林春男・重川希志依・浦田康幸・亀田弘行: 災害エスノグラフィーの標準化手法の開発—インタビュー・ケースの編集・コード化・災害過程の同定—, 地域安全学会論文報告集, No. 2, pp. 267-276, 2000

表 - 1 テキスト化処理原則

問題点	変更点
誤った助詞の使い方	例: 電柱は→電柱わ
漢字のミス	例: 被災→被害 一連間→一週間
漢字が使用されておらず読みにくい	読みやすく漢字へ
会話が省略されている	例: インタビュー動画を視聴し省かれている箇所を埋める
改行されていない	話者が変わると改行

表 - 2 テキスト化結果

No.	班名	インタビュー	班員数(人)	テキスト化文字数	テキスト化作業時間
1	喜佐方1	毛利	4	1877	55分
2	喜佐方2	内田	3	4807	89分
3	奥南	浜名	6	4743	81分
4	奥南	山下	6	1210	38分
5	立間1	児玉	3	3986	89分
6	立間1	酒井	3	617	12分
7	立間2	佐々木	4	3214	91分
8	立間2	平山	4	2754	56分
9	立間3	池田	4	2711	84分
10	立間3	薬師寺	4	2624	65分
11	吉田4	加賀山	4	3986	110分
12	吉田4	丸山	4	1170	27分
13	吉田4	吉田公民館	4	2227	53分
14	吉田5	越智	7	1194	35分
15	吉田5	清水	7	6409	162分
16	吉田5	山本	7	5671	88分